

## 主 旨 説 明

今から20年ほど前に、現農学部長の植木先生、前農学部長の小倉先生などの方々により、「限界地農業の展開」という本が出されました。ここでの限界地という言葉は農業経済学での用語で、「農産物価格形成において規制的役割を果たす豊度（豊かさ）の土地」を指すそうです。しかし、この本では、そのうえであえて、鹿児島県の農業を、自然環境の点から「温帯作物にとっても限界であり、熱帯作物にとっても限界になるという中途半端性が技術開発をある意味では困難にしているし、逆に病害虫については温帯性のそれも熱帯性のそれも同居させるというマイナス要因として作用する」という意味で、限界地農業として捉えています。

鹿児島県の自然環境との関係を果樹の方から見ても、例えば、亜熱帯性のポンカンには少し気温が不足気味で、着花、結実が悪くて収量が上がらないとか、温州ミカンには少し気温が高目で、果皮の着色が遅れるという問題があり、「青切り」と称する、果皮がほとんど緑の果実が出荷されていたということは、皆様ご承知の通りです。また、落葉果樹については休眠の問題、梅雨の問題、病虫害の問題などで、鹿児島県においては、最近までの栽培はごく少ない状態でした。しかし、ここで発想の転換をすれば、鹿児島県が亜熱帯と温帯の中途半端のところにあるということは、工夫をすれば、亜熱帯果樹も温帯果樹も栽培できるということになると思います。

最近日本では温州ミカンの過剰生産から新しい果樹の導入が盛んです。その最も成功した例がキウイ・フルーツでしょう。新しい果樹の導入は外国でも盛んに行われており、ニュージーランドやオーストラリアでの日本ナシやカキの栽培、イスラエルでのカキの栽培、スペインのビワの栽培など、西欧における東洋原産果樹の導入が目を見せます。東南アジアでも温帯性の落葉果樹の栽培に関心が深いようです。

これからの鹿児島（離島も含めて）など西南暖地の果樹栽培においては、亜熱帯果樹も積極的に導入し、一方では、落葉果樹も作りこなしていくことが、ますます重要になっていくものと考えられます。また、その栽培を確立することによって、日本より南の熱帯・亜熱帯地域での果樹産業にも大いに役立つのではないかと思います。

このような問題を意識しながら、今日のシンポジウムでは、まず、亜熱帯よりの遺伝資源の導入の問題について柑橘を中心にご紹介頂き、次に、亜熱帯果樹の日本における栽培の問題について、柑橘とそれ以外の果樹についてご検討いただき、さらに、温帯の果実を亜熱帯で栽培するときの問題点について、お話いただくことに致しました。このシンポジウムの成果が、鹿児島はもとより、さらに南の地域における果樹栽培に、大いに活用されることを願っております。

1989.10.20. (金)

シンポジウム「果樹—亜熱帯と温帯の接点—」

企画責任者：鹿児島大学農学部 岩堀修一